



## Kobe Shoin Women's University Repository

|                        |   |
|------------------------|---|
| Title                  | クムラン第4洞穴で発見された「祭司のカレンダー」について(1)<br>Calendrical Texts from Qumran Cave 4 (1) |
| Author(s)              | 勝村 弘也 (KATSUMURA Hiroya)  |
| Citation               | キリスト教論藻(KIRISUTOKYO RONSO), No.36:1-27                                      |
| Issue Date             | 2005  |
| Resource Type          | Bulletin Paper / 紀要論文   |
| Resource Version       |   |
| URL                    |   |
| Right                  |   |
| Additional Information |   |

# クムラン第4洞穴で発見された 「祭司のカレンダー」について (1)

勝 村 弘 也

## 1. はじめに

クムランの第4洞穴からは、多数のカレンダーテキストの断片が発見された。このカレンダーが、いわゆる「死海文書群」全体の中で占める重要性については、これまでに我が国で出版された各種の書物においてすでに十分に述べられている<sup>(1)</sup>。クムランに居住していた人々が、どのような人々であったのかに関しては、様々な推定がなされているが、その論拠となるべき資料としてまず第一に問題にしなければならないのは、賛歌や聖書テキストの解釈文書、各種の祈祷文などではない。これらの文書よりも重要なのは、彼らの生活の現実を具体的に示している文書である。カレンダー、占星術関係の文書、「共同体の規則 (1QS)」、食卓での作法などは、その一字一句がクムランの住民にとって有効であったと考えられるから、きわめて客観性の高い資料と言える<sup>(2)</sup>。特に暦に関しては、当時のユダヤ教団の「主流派」が使用していたものと異なったものが、クムランで使われていたことが明らかになれば、クムラン教団がそれとは全く別の宗教的な生活を組織していたことの決定的な証拠となる<sup>(3)</sup>。実際にクムランでは、主流派の使っていた太陰暦とは別の固有の太陽暦が使われていたのであり、従ってユダヤ教徒にとって重要な祝祭日は異なった日に設定されていたのである。

本論考においては、第4洞穴から発見されたカレンダーテキストの断片を翻訳し、これに簡単な注釈を加える。このカレンダーは、欠けている部分が多いにもかかわらず、その主要な部分に関してはほぼ完全に復元することが出来る。その結果、クムラン教団では、1年が364日からなる独自の太陽暦

が用いられていた事がわかった。解読のひとつの鍵となったのは、祭司の奉仕する週に関する歴代誌上24章の記述である。第4 洞穴から発見されたカレンダーテキストの断片にもほとんど全く同じ人名が、同一の規則に従って登場するからである。そこでまず、この祭司の当番表を以下に掲げる。

## 2. 祭司の奉仕する週の順序（歴代誌上24章による）

|           |            |             |
|-----------|------------|-------------|
| 1 イエホヤリブ  | 2 イエダアヤ    | 3 ハリム       |
| 4 セオリム    | 5 マルキヤ     | 6 ミヤミン      |
| 7 ハコツ     | 8 アビヤ      | 9 イエシユア     |
| 10 シェカンヤフ | 11 エルヤシブ   | 12 ヤキム      |
| 13 フツパ    | 14 イエシエブアブ | 15 ビルガ      |
| 16 イメル    | 17 ヘジル     | 18 ハッピッツエーツ |
| 19 ペタフヤ   | 20 イエヘズケル  | 21 ヤキン      |
| 22 ガムル    | 23 デラヤフ    | 24 マアズヤフ    |

上の表では、マソラ本文が示している人名を、母音符号を含めて出来るだけ忠実に音訳しようとした。クムランカレンダーでは、マソラとは少しアルファベット表記が異なる人名が現れることがある。例えば、イエホヤリブの替わりにヨヤリブと読むことの出来る人名になっている場合などである。翻訳に際しては、カレンダーテキストの示している人名を尊重することにした。但し、クムランで上記の表と当番の順序が異なっている訳ではない。

クムランのカレンダーは、1 年が364日からなる太陽暦である。旧約でも現代のユダヤ教団が使っているカレンダーでも基本は太陰暦であるから<sup>(4)</sup>、ここには全く別種のカレンダーが存在したことになる。但しこのような太陽暦は、旧約偽典の「ヨベル書」などによっても採用されているから、まったく孤立して存在していたわけでもなさそうである<sup>(5)</sup>。もっとも、ヨベル書がクムラン教団によって書かれた文書であるとの説も十分成り立つが。

1 年が364日からなる太陽暦では、1 年は丁度52週となる（7 日×52＝364

日)から、日付と曜日は常に一致する。つまり祭日も何月何日の何曜日と決まってくることになるから、この点では非常に都合がよい。このカレンダーでは、1月1日は毎年水曜日である。なぜ新年が水曜日から始まるのかというと、創世記1章の天地創造物語で水曜日に太陽と月が造られているからである。クムラン教団の立場からすると、この暦は創世記1章14節の「天の蒼穹に輝くものがあって、昼と夜とを分けるように。それらはしるしとなって、季節と日と年とを刻むように」、との第4日目(つまり水曜日)の神のことに忠実に従っていることになる。祭司の当番表は、24週で1巡するから、48週ですべての組の年2回の当番が終わる。そうすると1年にはさらに4週の奉仕が必要だから、毎年4組ずつずれて行くことになり、6年で元に戻る。クムランのカレンダーは、この6年間の祭司の当番表をすべて記録していた。従って解説によって復元されたカレンダーも6年分存在することになる。本論考の提示する訳文の理解を容易にするために、本論考の注の後に「復元されたカレンダー表」を掲げることにするが、スペースの関係から「1年目」だけにとどめざるをえない。なお、この表に現われるXとDの記号については、以下で説明する。

### 3. 解説に際しての重要な問題

カレンダーテキストの本文に関しては、欠損が多い場合でも主要な部分を復元することが可能である。しかしながら、その解釈に関しては、研究者の間で意見が割れている箇所がいくつかある。それもシステム全体をどのように考えるのかと言う重要な点で、見解の相違が目立つのが研究の現状である。ここではそのような解釈上の問題について、訳文を提示する前に簡単に述べておく。

4Q320の断片1、第1欄6行目は、この暦の第1年の1月30日(木曜日)に或る天体現象が起こると述べている。これが月に関して観察される現象であることは容易に推定できる。同様の現象が規則的に29日目あるいは30日目に起こる事が7行目以下に記されているからである。この現象を本論考の末

尾の表では、X（エックス）として表示している。問題はこの X デイが何を意味するかであって、研究者の間で意見が分かれる。この X デイは、論理的に考えて、第 1 年の 1 月 1 日（水曜日）にも起こっていることになるが、この暦での月による日数の数え方は、1 月 30 日を「第 29 日」としていることから判断して、X デイの翌日を太陰暦の「第 1 日」としていることになる。

4 Q321 には、ヘブライ語の子音で dwqh と記されている月に関する或る現象が、登場する。この語は、聖書にもラビ文献にも現れない語であって、現在の所では死海文書以外での用例は知られていない。正確な発音も不明であるが、通常 duqah と呼ばれている。この現象を本論考の末尾の表では、D として表示している。この D デイの解釈に関しても、この語の語源や X デイとの関連で意見が分かれている。

細かい議論を省略すれば、学説は以下の 2 つに分かれているものとして整理できる。多数意見は、X デイを満月、D デイを新月とする解釈である（以下これを A 学説とする）<sup>(6)</sup>。これに対して、X デイを新月、D デイを満月とする少数意見がある（以下これを B 学説とする）<sup>(7)</sup>。

dwqh の語根としては、dwq が考えられるが、その意味は「観察する」であるとされる<sup>(8)</sup>。A 学説によると朔の後に起こる新月の出現が観察される日が D デイだということになる。普通、月に関して特に観察が問題になるのは、新月の出現であるから、この点では A 学説に説得力がある。この説では、X デイは満月、つまり天地創造が行われた最初の水曜日に観察された月の姿は満月であったことになる。これと関連して、4 Q320 の断片 1、第 1 欄の冒頭で「東から出現」と述べられている天体は、月であると解釈されることになる。なるほど、神が天地を創造した時の最初の月の姿が、新月なのか満月なのかとなると、満月であると考えの方が自然のように思われる。しかしながら、この学説に問題がないわけではない。まず、太陽暦を採用しているカレンダーの冒頭で（厳密に言えば、テキストの冒頭の 1 語は失われているが）なぜ、太陽の出現ではなくて、月の出現について語られていると解釈しなければならないのかが問題になる。「東から出現」と述べられている天体を太陽であるとする解釈も成り立つのではないか。さらに月の日

数（月齢）を数えるのに、新月からではなくて満月の欠け始める日から数えるという習慣が、少なくともセム語族の文化圏では一般的ではないという事実がある。そこで問題になるのが、B 学説である。

DJD のカレンダーテキストを担当している Talmon は、X デイを新月とする。このような月齢の数え方は、セム語族の文化圏では一般的であり、旧約の伝承とも一致する<sup>(9)</sup>。クムラン教団がこのような点で他のカレンダーとの違いを立てたと考える必要はない。クムランと同様の太陽暦を採用しているエチオピア語エノク書73章4節でも新月が基準になる日の数え方になっている。D デイの方は、正確には満月ではなくて、満月が欠け始めるのが観察される日ということになる。さらに4 Q320の断片1、第1欄の冒頭で「東から出現」と述べられている天体は、太陽であると Talmon は主張するが、この場合直後の「夕から朝まで」をどのように解釈すべきかが問題になる<sup>(10)</sup>。この点から見ると B 学説にはやや説得力に欠けるところがある。

以上のように、AB いずれの学説を採用するにしても解釈に幾分か無理なところが生じる。以下に提示するテキストの翻訳では、現在までの多数意見に従って、A 学説を採用している。しかしながら、Talmon の DJD での詳細な解説からは多く学ぶべきところがあることをここに記しておく。

## 4. 翻訳と注釈<sup>(11)</sup>

### 4 Q320 断片1

【形状】この断片は、上辺の方が大きい台形のような形をしている。最大横幅は、11.7センチ、縦は13.1センチある。ほぼ中央の幅約1センチのスリットによって2つの欄に区分される。第2欄の左側にも5行目までは、第3欄との間のスリットが残されていて、第3欄の2行目と4行目の先頭の文字の痕跡がかすかに見えているが判読はできない。第1欄の右側は失われているが、第2欄の上5行目までは完全に残っており、6行目も羊皮紙の左側が欠けてはいるが、記されている文字は完全に読める。第2欄で最も長い行は3行目で5.7センチある。第1欄に残されている行の長さは、3—4.5センチ程

度であるが、ここにも第2欄と同じ位の大きさの欄が存在したものと推定される。この巻物の断片の上辺は、かなりきれいに残っており、第1行目までの間には幅約1.5センチの上部欄外余白が置かれている。第1欄の14行目以下にも空白部（下部欄外余白）が見えるから、この巻物は14行から構成されていたことが分かる<sup>12)</sup>。

\* 以下の訳文において、[ . . . ] は、テキストには存在しないが、推読して補った語であることを示す。( . . . ) は、翻訳の都合上、意味を明確にするために訳者が補った語であることを示す。実際には推読にも色々な場合がある。例えば単語の大部分が保存されている場合には、特に推読としては扱わない。次の訳文を例にとると、6行目の「[イエダア] ヤ」では語尾の yh だけがかろうじて判読できる。9行目「[ビルガ]」では、語尾の h だけが残っているが、ビルガ全体を推読したように表記するしかない。固有名詞の場合には、単語のどの部分を補ったのかを表記することが比較的容易だが、他の語では、原文に単語の一部のアルファベットが残られていてもそれを訳文で示すのは困難である。5行目の「最初」の場合ではこの語の語尾 nh が残されているので、「最[初]」と表記している。7行目の「安息日」は完全に推読によって補われた語である。

## 第1欄

- 1—5 . . . その東からの出現のため、[創造の] 基礎付けのときに、夕から朝まで、天の中央 [で] 輝くために。(それは太陽暦の) 最[初]の年の1月、[ガ] ムルの (奉仕する) 週の第4日に (当たる)。空欄。
- 6 [イエダア] ヤ (の奉仕する週) [の第5日]。(それは太陰暦の) 第29日、(太陽暦の) 同じ月の30日に (当たる)。
- 7 [ハ] コツ (の奉仕する週) [の安息日]。(それは太陰暦の) 第30日、(太陽暦の) 2月の30日に (当たる)。
- 8 [エルヤ] シブ (の奉仕する週) [の第1日]。(それは太陰暦の) 第29日、(太陽暦の) 3月の29日に (当たる)。

- 9 [ビルガ] (の奉仕する週) [の第3日]。(それは太陰暦の)第30日、(太陽暦の)4月の28日に(当たる)。
- 10 [ペタ] フヤ (の奉仕する週) [の第4日]。(それは太陰暦の)第29日、(太陽暦の)5月の27日に(当たる)。
- 11 [デラヤ] (の奉仕する週) [の第6日]。(それは太陰暦の)第30日、(太陽暦の)6月の27日に(当たる)。
- 12 [セオリ] ム (の奉仕する週) [の安息日]。(それは太陰暦の)第29日、(太陽暦の)7月の25日に(当たる)。
- 13 [アビヤ] (の奉仕する週) [の第2日]。(それは太陰暦の) [第30日]、(太陽暦の)8月の25日に(当たる)。
- 14 [ヤキム] (の奉仕する週) [の第3日]。(それは太陰暦の)第2[9]日、(太陽暦の)9月の24日に(当たる)。

### 【注釈】

テキストの冒頭には、創世記1章14節以下の天地創造の第4日目に関する記述を強く意識した詩的な文章が登場する。この日は、先に述べたXデイに当たる。

1行目：最初の語は失われている。「出現のため」と訳した語は、動詞「見る」(r'h)のニファル形不定詞である。これには人称接尾辞が付いているが、当然のことながら母音符号がないので、男性形か女性形かを判別することが出来ない。「東から」現われる天体が、月なのか太陽なのかに関して論争されている。3行目の「夕から朝まで」という表現から判断すると、満月であると考えられる。

2行目：この行の先頭、1行目と2行目の間に小さな文字で、l'yryhと書き込まれているのが何とか判読できる。但し、アレフの文字は見えないので、推読の結果である。これを「輝くために」と訳した。「天の中央」という表現は、Talmonによれば、もっぱら太陽に関して用いられるアラム語の表現を想起させると言う<sup>10)</sup>。「基礎付け」と訳した語(yswd)は、動詞ysdからの派生語。この動詞は、聖書の天地創造に関する伝承においてきわめて重要



な役割を演じており、特に大地の基礎付けに対して用いられている（イザヤ書48・13、詩篇104・5等）。「基礎付け」は「創造」と同義語的に用いられる場合もある（イザヤ書40・21、ヨブ記38・4参照）。

3行目：「夕から朝まで」は、創世記1章で繰り返される「夕となり朝となった」を意識した表現。「週」の原語はシャバートである。クムラン文書では、「安息日」ではなくて「週」の意味で用いられることがよくある。「週の第4日」は、水曜日を指す。6行目の「週の第5日」は木曜日であって、以下同様の表現がつづく。

4行目：「ガムル」は、個人の名ではなく、ガムルの子孫である祭司であることを示す<sup>44</sup>。彼らはもちろん系図をもっていたであろうが、むしろ、当番に当たる祭司の組の名称と考えた方がよい。

6行目以下：いわゆるXデイを示すリストである。7行目のハコツの週に関しては、本論考の末尾のカレンダー表では、ミヤミンの週のように見える。しかし実際には、当番の祭司の交替は、安息日の夕方に行われるから2月30日の月の見える夕方には、すでにハコツの週に入っていることになる。12行目に関しても同様に7月25日の安息日の夕方はすでにセオリムの担当になっている。

## 第2欄

- 1 イメル（の奉仕する週）の第5日。（それは太陰暦の）第30日、（太陽暦の）10月の23日（に当たる）。
- 2 イェヘズケル（の奉仕する週）の第6日。（それは太陰暦の）第29日、（太陽暦の）11月の22日（に当たる）。
- 3 ヨヤリブ（の奉仕する週）の第1日。（それは太陰暦の）第30日、（太陽暦の）12月の22日（に当たる）。
- 4 第2年。空欄。
- 5 マルキヤ（の奉仕する週）の第2日。（それは太陰暦の）第29日、（太陽暦の）1月の20日（に当たる）。
- 6 イェシュア（の奉仕する週）の第4日。（それは太陰暦の）第30日、（太

- 陽暦の) 2月の20日(に当たる)。
- 7 フッパ(の奉仕する週)の第5日。(それは太陰暦の)第29日、(太陽暦の)[3月の]19日(に当たる)。
- 8 ピッツエーツ(の奉仕する週)の安息日。(それは太陰暦の)第30日、(太陽暦の)4月の18日(に当たる)。
- 9 ガムル(の奉仕する週)の第1日。[(それは太陰暦の)第29日、(太陽暦の)5月の17日](に当たる)。
- 10 イエダアヤ(の奉仕する週)の第3日。(それは太陰暦の)第30日、[(太陽暦の)6月の17日(に当たる)]。
- 11 ミヤミン(の奉仕する週)の第4日。(それは太陰暦の)第2[9日、(太陽暦の)7月の15日(に当たる)]。
- 12 シェカンヤ(の奉仕する週)の第6日。(それは太陰暦の)第3[0日、(太陽暦の)8月の15日(に当たる)]。
- 13 ビル[ガ](の奉仕する週)の安息日。[(それは太陰暦の)第29日、(太陽暦の)9月の14日(に当たる)]。
- 14 [ベタフヤ(の奉仕する週)の第2日。(それは太陰暦の)第30日、(太陽暦の)10月の13日(に当たる)]。

#### 【注釈】

第1欄のつづき。Xデイのリストがつづく。4行目からは第2年目のリスト。1行目：「イメルの」は、1行目の上、つまり上部余白に小さく書き込まれている。脱落に気づいた筆記者が後から補筆したのであろう。

#### 4 Q320 断片 2

【形状】この断片の大きさは、横約8センチ、縦約5.3センチである。欄の上の方が失われている。断片1第2欄のつづきになるはずの第3欄の下の部分であると考えられ、失われた上の部分には8行が存在したと推定される。9行目は、冒頭の3字しか残っていないし、10行目も途中からは下の半分が残っているだけである。しかしながら、断片1第2欄につづく第3欄としては

は完全に読める。1行目から8行目までは、このような方法によって復元可能であるが、ここでは少しでもテキストの残っている9行目以下のみを訳す。

- 9 イ [エシュア] (の奉仕する週) の第1日。[(それは太陰暦の) 第29日、(太陽暦の) 7月の5日 (に当たる)]。
- 10 フツパ (の奉仕する週) の第3日。(それは太陰暦の) 第30日、(太陽暦の) 8月の5日 (に当たる)。
- 11 ヘジル (の奉仕する週) の第4日。(それは太陰暦の) 第29日、(太陽暦の) 9月の4日 (に当たる)。
- 12 ヤキン (の奉仕する週) の第6日。(それは太陰暦の) 第30日、(太陽暦の) 10月の3日 (に当たる)。
- 13 イェダアヤ (の奉仕する週) の安息日。(それは太陰暦の) 第29日、(太陽暦の) 11月の2日 (に当たる)。
- 14 [ミヤ] ミン (の奉仕する週) の第2日。(それは太陰暦の) 第30日、(太陽暦の) 12月の2日 (に当たる)。

#### 【注釈】

断片1、第2欄のつづき。第3年目の7月以下のXデイのリストになっている。

#### 4 Q320 断片3

【形状】横約4センチ、縦約6センチからなるほぼ長方形の断片である。2つの欄からなり、左寄りの中央に幅約1センチのスリットがある。

#### 第1欄

2 [・ ・ ・] 聖なる年々。3 [・ ・ ・] 創造、聖 4—5 [・ ・ ・] [ガム] ル [の子ら] (の奉仕する) 週の第 [4日]、すべての年々の始 [め]。  
6 [・ ・ ・] 第2のヨベルの [オート] ート。7 [17オートー] ト。空欄。

### 【注釈】

3行目：「創造」を意味する bry'h は、4 Q319の「オートート（しるし）文書」にも出る。この行の最後の語「聖」が、構文上すぐ前の「創造」と関係するのかどうかは分からない。おそらく、「創造」までがひとつの文であって、「聖」は次の行の語と関係するのであろう。

4－5行目：「すべての年々の始 [め]」は、断片1の第1欄が言及するこのカレンダーの冒頭の日のことを指すのであろう。かろうじて判読可能な5行目の最初の文字は、ラメドである。これは人名 Gamul の最後の文字であると推定される。そうすると4行目の判読困難な部分が、第4日すなわち水曜日を意味すると解釈される。断片4第2欄参照。すでに述べたように、このカレンダーの1月1日は、常に水曜日である。

6－7行目：4 Q319の「オートート（しるし）文書」参照<sup>10</sup>。これ以上の説明は、ここでは省略する。

### 第2欄

- 1 [ . . . ]
- 2 [ . . . ] の犠牲をもって、[ . . . ]
- 3 日々 [ . . . ]
- 4 聖 [ . . . ]
- 5 第2、30 [ . . . ]
- 6 第3、3 [ 1 . . . ]
- 7 第4、30 [ . . . ]

### 【注釈】

1行目：先頭の文字の一部が見えるが、メムともベートとも読める。

5行目：「第2」は、2月を意味し、30日からなることを述べるのであろう。以下の行も3月が31日、4月が30日あると読める。これ以上、推定してもあまり意味がない。

#### 4 Q320 断片 4

【形状】断片 4 として扱われているのは、最大横幅18.5センチ、縦10.7センチの虫食いの激しい断片（これを断片 A とする）と横6.5センチ、縦6センチの同じく虫食いの激しい断片（これを断片 B とする）に2つの小片を加えたものである。これらを合成して復元すれば、横22.3センチ、縦13.5センチの大きさになる。ただし、毀損が激しいので、その半分以上は欠けている。この断片 4 には、合計6つの欄が残されているが、通常のクムランの巻物とは異なり、各欄の横幅が相当異なっている。断片 B には、第1、第2、第3各欄の下の方、約3分の1が保存されており、断片 A には、第3欄（1行目から9行目まで）と第4、第5、第6欄の一部が保存されている。第1欄の横幅はよく分からないが、19字分程度のスペースがあったと推定される。第2欄の横幅は約2センチ、文字数にして最大13から14文字程度である。ところが、第3欄と第5欄の横幅は約4センチある。第4欄は約3センチ、第6欄は2.7センチとなっていて一定しない。各欄の間のスリットも例えば、第2欄と第3欄の間が7ミリほどしかないのに対して、第4欄と第5欄の間は2.5—3センチもある。なお、写真でみると、第3欄と第4欄の間および第5欄と第6欄の間には、羊皮紙を縫い合わせた糸が見えている。なぜこのような巻物が出来上がったのかについては、色々な推定が可能である。内容的に見ると第3欄から祭日の一覧が始まっているから、第1欄と第2欄に関しては、先行するテキストの末尾に付けられた結びのことばである可能性を排除することは出来ないが、第3欄から始まる祭日一覧の前文のようなものがここにあると考えるのが自然であろう。しかし、それがなぜこのようにスペースを切り詰めた形で書かれているのであろうか。第3欄が書かれた後で、筆記者が余白に無理に書き込んだためなのであろうか。第4欄と第5欄の幅の違いも気になる。筆写した者が全体の字配りの予想を誤ったからからであらうか。何とも説明の困難な巻物の出来具合である。

#### 第1欄

11 [・ ・ ・] ヨヤリ[ブ]

- 12    [・ ・ ・]    マルキヤ  
 13    [・ ・ ・]    [イエ] シュア  
 14    [・ ・ ・]    イエシェブアブ

### 【注釈】

第1欄と第2欄の下部の欄外余白が認められることから、「イエシェブアブ」で14行目が終わっていたと推定される。人名の並び方から判断して、カレンダー第5年の9月から12月までの各月の開始日が、どの祭司の組の当番になっているかを示すリストの一部ではないかと解釈されている。例えば、第5年の9月1日（日曜日）は、ヨヤリブの担当する週になっている。

### 第2欄

- 10    日々、また諸週のために  
 11    月々のために  
 12    また年々 [のため]、また解放の（年の）ために、  
 13—14    またヨベルの年のため。ガムルの子らの（奉仕する）週の第4日に

### 【注釈】

1—9行目はまったく存在しないが、10—14行目は、ほとんど完全に残っている。ここで「・ ・ ・のために」と訳しておいた前置詞は、1である。

10行目：「日々」(hymym)には定冠詞が付いているので、9行目の最後の語が連語形であった可能性が高い。例えば「すべての日々のために」(lkl hymym)となっていたのだろう。šbt（シャツバート）の意味は、ここでは「安息日」ではなくて、「週」である。14行目のシャツバートも同じ意味である。

12行目：「解放の（年）」(šmtyym)は、男性名詞の複数形である。この語は、申命記15章1節以下のシェミッター（女性名詞）つまり「負債の免除」と関係しているように思われる。このような負債免除は、7年目の終わりごとに実施されることになっている。レビ記25章にも7年ごとの「安息年」の規定

がある。ここでの šmty<sup>7</sup>m の意味は、1 QS の第10欄 7 行目以下の「週年」つまり 7 年周期と同じと考えられる<sup>80</sup>。

13—14 行目：ここでは、「ガムルの（奉仕する）週」ではなくて、「ガムルの子らの（奉仕する）週」となっている。この週の第 4 日、つまり水曜日から、第一年目の 1 月 1 日は始まっている。断片 1 第 1 欄の冒頭を参照。

### 第 3 欄

- 1 第 1 年、その祭日。
- 2 メオズヤの子らの週の第 3 日。空欄。過越。
- 3 イェダア [ヤ]（の奉仕する週）[の] 第 1 日、[(大麦の) 初穂] の揺祭。
- 4 セオリム（の奉仕する週）の第 5 日、[第 2 の] 過越。
- 5 イエシュア（の奉仕する週）の第 1 日、七週の祭。
- 6 メオズヤ（の奉仕する週）の第 4 日、記念の日。
- 7 ヨヤリブ（の奉仕する週）の第 6 [日]。贖罪の日、
- 8 第 7 [の月に]。空欄。
- 9 [イエダ]アヤ（の奉仕する週）[の第 4 日]、仮庵の祭。
- 10 空欄。
- 11 第 2 (年)、その祭日。
- 12 セオリム（の奉仕する週）[の第 3 日]、過越。
- 13 ミヤ[ミ]ン（の奉仕する週）[の第 1 日]、[(大麦の) 初穂] の揺祭。
- 14 [ア]ビヤ [(の奉仕する週) の第 5 日、第 2 の過越。]

### 【注釈】

クムラン教団では、祭日の月日と曜日は固定されていた。ただ、当該の日の祭司の当番は、年によって異なり、6 年間で一巡する。そこで 6 年分の当番表を作成しておいたのである。この表によってクムラン教団では、どのような祭日を設けていたかが分かる。旧約で「三つの巡礼祭」として規定されている（出エジプト記 23 章 14 節以下、34 章 18 節以下、申命記 16 章）ペサハ（過越の祭）、ショヴオト（七週の祭）、スコト（仮庵の祭）は、ここでも祝われ

ていた。但し、ショヴオト（女性名詞複数形）は、シェヴィーム（男性名詞複数形）と呼ばれている。

ここで言及されている祭日の日付を確認すると以下ようになる。1月14日、過越。初穂の揺祭1月26日。第2の過越、2月14日。七週の祭、3月15日。記念の日、7月1日。贖罪の日、7月10日。仮庵の祭、7月15日。

レビ記23章11節によればオメル（大麦の初穂）は「安息日の翌日」に揺祭として捧げることが定められている。クムランではこれが忠実に守られていたことが分かる。この日から50日後が七週の祭（ペンテコステ）になる（レビ記23章16節）。クムランでは、3月15日の日曜日が七週の祭と定められていてこれは動かない。モーセ五書には、この祭りの月日に関する規定がない。そのため、サドカイ派とパリサイ派の間で論争が起こることになった<sup>94</sup>。パリサイ派の規定によれば、ニサン月16日（これは過越の祭の第2日ということになる）がオメルを捧げる日となり、この結果、シワン月6日が七週の祭と定められることになった。しかしこのように定めると、レビ記23章11節のオメルの揺祭を捧げる日は「安息日の翌日」であるとする規定は無視されることになる。パリサイ派の暦は太陰暦であって祭日の曜日は動くからである。さらにこのオメルを捧げる日は、元々大麦の収穫と関係する農民の祭日であるから、季節と一致していなければならない。この点でも太陽暦の方がずれは少ない。

過越に関していうと、聖書は1月14日の夕方を過越と定めている（レビ記23章5節）。クムランでももちろんこの日付を守っているが、これには元々「満月の夜」であるという意味がある。したがって太陰暦によらなければ、実質的にはこの規定を守った事にはならない。この点からいうとパリサイ派の方が、聖書の規定に忠実ということになる。「種入れぬパンの祭(除酵祭)」に関しては、このリストには記載がないが、4Q326には、「週の第4日」との記載がある<sup>95</sup>。つまり過越の翌日の水曜日ということになる。

現代のユダヤ教では、秋から新年が始まる。つまり旧約時代の7月が1月になる。クムランカレンダーの言う「記念の日」は、現代のローシュ・ハッシャーナーに相当することになる。この日から贖罪の日の準備が始まったの



であろう。

#### 第4欄

- 1 [フッ]パ (の奉仕する週) の第1日、七週 [の祭。]
- 2 セオリム (の奉仕する週) の第4日、[記] 念の日。
- 3 マルキヤ (の奉仕する週) の第6日、贖罪の日。
- 4 ミヤミン (の奉仕する週) [の第4日]、仮庵の祭。
- 5 空欄。
- 6 第3(年)、その祭日。
- 7 アビヤ (の奉仕する週) の第3日、過越。
- 8 シェカンヤ (の奉仕する週) の第1日、(大麦の) 初穂の揺祭。
- 9 ヤキム (の奉仕する週) の第5日、第[2の] 過越。
- 10 ヘジル (の奉仕する週) の [第1日]、[七週の祭。]
- 11 [アビヤ (の奉仕する週) の第4日、記念の日。]
- 12—13 欠
- 14 [第4年、その祭日。]

#### 第5欄

- 1 [ヤキ]ム (の奉仕する週) [の第3日]、過越。
- 2 [イエシエ]ブアブ (の奉仕する週) の第1日、(大麦の) 初穂の揺祭。
- 3 [イ]メル (の奉仕する週) の第[5]日、第2の過越。
- 4 [ピッ]ツエーツ (の奉仕する週) [の第1日]、七週の [祭。]
- 5 ヤキム (の奉仕する週) の第4 [日]、記念の日。
- 6 フッパ (の奉仕する週) の [第6日]、贖罪の日。
- 7 イエシエブアブ (の奉仕する週) の [第4日]、仮庵の祭。
- 8 空欄。
- 9 [第5(年)、] その祭日。
- 10 イメル (の奉仕する週) の第3日、過越。
- 11 [ピッ]ツエーツ (の奉仕する週) [の第1日]、(大麦の) 初穂の揺祭。

- 12 イエヘズケル（の奉仕する週）の第5〔日〕、第2の過越。
- 13 〔ヨヤリ〕ブ（の奉仕する週）〔の第1日〕、〔七週の〕祭。
- 14 〔イメル（の奉仕する週）の第4日、記念の日。〕

## 第6欄

- 1 ヘジル（の奉仕する週）の第6日、贖罪の日。
- 2 ピツエーツ（の奉仕する週）の第4日、仮庵の祭。
- 3 空欄。
- 4 第6（年）、その祭日。
- 5 イエヘズケル（の奉仕する週）の第3日、過越。
- 6 ガムル（の奉仕する週）の第1日、（大麦の）初穂の揺祭。
- 7 マアズヤ（の奉仕する週）の第〔5日〕、〔第2の〕過越。
- 8 マルキヤ（の奉仕する週）の第1〔日〕、〔七週の〕祭。
- 9 イエヘズケル（の奉仕する週）の第4〔日、記念の日〕。
- 10 ヤキン（の奉仕する週）の第6〔日、贖罪の日〕。
- 11 〔ガムル（の奉仕する週）の〕第4〔日、仮庵の祭〕。

## 【注釈】

第4欄から第6欄までで2年目の後半から6年目の終わりまでの祭日の表が完成している。

## 4 Q321 断片1と断片2

【形状】断片1と断片2は、同じ文書の第1欄と第2欄を含んでいる。断片1が第1欄の右側を保存する（もっとも右端は失われているが）のに対して、断片2が第1欄の左端の3—8行目と第2欄の一部を保存するという関係にある。マルチネ版では、断片1、2、3をすべて「断片1」として扱っているが、これは3つの断片があきらかに同じ文書の第1—3欄に当たるからである。DJDの言う断片1は横幅最大8.4センチ、縦最大8センチの虫食いの激しい断片である。上の縁は4センチほどきれいに残っており、幅1.3セン

チの上部余白がある。ここから8行文字が書かれ下部の余白には幅1.5センチがとられている。4行目が最もよく残されているが、この行でも右端は7字分ほど欠けていると推定される。断片2は、横幅が最大13.5センチ、縦7.4センチあるが、虫食いが激しく、第2欄の文字の書かれた部分の中央部が、上から下にかけて失われており、下の余白部でかろうじて左右につながっている。右端には第1欄の左端が残され、その左側に幅1—1.3センチの余白（スリット）があって、第2欄が始まっている。ここにも8行書かれていたことが分かる。上部余白はほとんど残っていないが、下部の余白は幅1.5センチでほとんど残されている。テキストを完全に復元した状態で見ると、第1欄には1行あたり67—70文字分のスペースが、第2欄には77—85文字分のスペースが存在することになる。このように第2欄の方が少し大きい。

## 第1欄

- 1 [イエダアヤ（の奉仕する週）の第1日（つまり日曜日）は、] 同じ月の第12日。（満月は、）アビヤ（の奉仕する週）の第2日、[8月の] 2 [5日（に当たる）。新月は、ミヤミン（の奉仕する週）の第3日、]
- 2 同じ月の [12日（に当たる）。]（満月は、）ヤキム（の奉仕する週）の第3日、[9月の2] 4日（に当たる）。[新月は、シェカンヤ
- 3（の奉仕する週）の第4日、] 同じ月の1 [1日（に当たる）。]（満月は、）イメル（の奉仕する週）の第5日、10月の23日（に当たる）。[新月は、イエ] シェブアブ（の奉仕する週） [の第6日、
- 4 同じ月の10日（に当たる）。]（満月は、）イェヘズケル（の奉仕する週）の第6日、11月の22日（に当たる）。[新月は、] ペタフヤ（の奉仕する週） [の安息日、]
- 5 [同じ月の9日（に当たる）。]（満月は、）ヨヤリブ（の奉仕する週）の第1日、12月の22日（に当たる）。[新月は、] デラヤ（の奉仕する週）の [第2日、
- 6 同じ月の9日（に当たる）。空欄。] [第] 2 [年の] 最初の（満月は、）マルキヤ（の奉仕する週）の第2日、[1月の2] 0日（に当たる。）新月は、

- 7 [ハリム (の奉仕する週) の第3日、] 同じ月の7日 (に当たる)。(満月は、) イェシュア (の奉仕する週) の第4日、2月の20日 (に当たる)。  
[新月は、ハ]コツ (の奉仕する週) [の第5日、同じ月の] 7日 (に当たる)。
- 8 [(満月は、) フッパ (の奉仕する週) の第5日、] 3月の1[9日 (に当たる)。] 新月は、[エ] ル [ヤシ] ブ (の奉仕する週) [の第] 6日、[同じ月の] 6日 (に当たる)。(満月は、) ピッツエーツ (の奉仕する週) の安 [息日]。

### 【注釈】

何年の何月何日に X デイと D デイが起こり、祭司のどの組の当番の日になっているかを表示している。翻訳にあたっては、A 学説に従って X デイを満月の日とし、duqah の起こる日 (D デイ) を「新月」とした。第1欄は、第1年の7月の途中から始まっている。ヘブライ語の bw' に関しては、Maier は、「入る事」と動詞の分詞にとるが、Talmon 等は、前置詞の b に人称接尾辞がついたものと解釈する。後者の読み方を採用した。

### 第2欄

- 1 [4月の18日。新月は、イメル (の奉仕する週) の第1日、] 同じ月の [5日 (に当たる)。] (満月は、) [ガムル] (の奉仕する週) の第1日、[5月の17日 (に当たる)。]
- 2 [新月は、イェ] ヘズ [ケル (の奉仕する週) の第2日、同じ月の4日 (に当たる)。(満月は、) イェダ] アヤ (の奉仕する週) [の第3日、6月の17日 (に当たる)。] 新月は、]
- 3 メオズヤ (の奉仕する週) の [第4日、] 同じ月の4日 (に当たる)。(満月は、) [ミヤミン (の奉仕する週) の] 第4日、7月の [15日 (に当たる)。] 新月は、[セオリム (の奉仕する週) の第5日、] 同じ月の [2日 (に当たる)。]
- 4 (満月は、) シェカンヤ (の奉仕する週) の第6日、[8月の1] 5日 (に

- 当たる)。[新]月は、アビヤ（の奉仕する週）の安息日、同じ月の2日（に当たる）。[(満月は、)ビルガ（の奉仕する週）の安息日、]
- 5 9月の14日（に当たる）。新月は、[フッパ（の奉仕する週）の第1日、]9月の[1日（に当たる）。]2回目の新[月は、ヘジル（の奉仕する週）]の第3日、
- 6 [同じ]月の[3]1日（に当たる）。(満月は、)ペタフヤ（の奉仕する週）の第2日、[10月の13]日（に当たる）。新月は、[ヤ]キン（の奉仕する週）の第4日、[同じ月の2]9日（に当たる）。
- 7 (満月は、)[デラ]ヤ（の奉仕する週）[の第3]日、[1]1[月]の12日（に当たる）。[新]月は、ヨヤリ[ブ]（の奉仕する週）の第6日、[同じ]月の29日（に当たる）。[(満月は、)ハリム（の奉仕する週）の第5日、]
- 8 12月の12日（に当たる）。新月は、ミヤミン（の奉仕する週）の安息日、[同じ]月の28日（に当たる）。空欄。第3（年）[ハコツ（の奉仕する週）の第6日、10日（に当たる）。]

### 【注釈】

第1欄のつづきで、第2年の4月から始まっている。

### 断片3

【形状】 横幅8センチ、縦5.8センチのほぼ長方形をしている。ここには断片1と2と同じ文書の第3欄の3—8行目が残されている。下方の余白は一部が残っておりその幅は1.6センチある。

### 第3欄

- 1 [最初の月。新月は、シェカンヤ（の奉仕する週）の第2日、同じ月の27日（に当たる）。(満月は、)ヤキム（の奉仕する週）の第1日、2月の10日（に当たる）。新月は、イエシェブアブ（の奉仕する週）の第3日、同じ月の26日（に当たる）。(満月は、)イメル（の奉仕する週）の第2日、]
- 2 [3月の9日（に当たる）。新月は、ピッツエーツ（の奉仕する週）の

- 第5日、同じ月の26日（に当たる）。(満月は、) イエヘズケル（の奉仕する週）の第4日、4月の8日（に当たる）。新月は、ガムル（の奉仕する週）の第6日、同じ月の24日（に当たる）。]
- 3 [(満月は、) メオズヤ（の奉仕する週）の第5日、5月の7日（に当たる）。新] 月は、ハリ [ム]（の奉仕する週）の第1日、同じ月の [24日（に当たる）。] (満月は、) マラ [キヤ]（の奉仕する週）の安息日、[6月の7日（に当たる）。新月は、コーツ（の奉仕する週）の第2日、
- 4 同じ月の23日（に当たる）。(満月は、) イエシュア（の奉仕する週）の第1日、] 7月の [5日（に当たる）。] 新月は、エルヤシブ（の奉仕する週）の第4日、[同じ月の2] 2日（に当たる）。[(満月は、) フッパ（の奉仕する週）の第3日、8月の5日（に当たる）。新月は、
- 5 ビルガ（の奉仕する週）の第5日、同じ月の21日（に当たる）。] (満月は、) ヘジル（の奉仕する週）の第4日、9月の4日（に当たる）。新月は、イエ [ヘズケル]（の奉仕する週）の安息日、[同じ月の21日（に当たる）。(満月は、) ヤキン（の奉仕する週）の第6日、10月の3日（に当たる）。]
- 6 [新月は、メオズヤ（の奉仕する週）の第1日、] 同じ月の1 [9日（に当たる）。] (満月は、) イェダアヤ（の奉仕する週）の安息日、11月の2日（に当たる）。新月は、[セオリム（の奉仕する週）の第3日、同じ月の19日（に当たる）。(満月は、) ミヤミン（の奉仕する週）の第2日、]
- 7 [12月の2日（に当たる）。新] 月は、アビヤ（の奉仕する週）の第4日、同じ月の18日（に当たる）。空欄。第4年。(最初の満月は、) シェカン [ヤ]（の奉仕する週）の第4日、[1月の1日（に当たる）。第2（の満月は、) イエシェブアブ（の奉仕する週）の第5日、同じ月の30日（に当たる）。]
- 8 [新月は、ヤキム（の奉仕する週）の第6日、] 1月 [の17日（に当たる）。] (満月は、) [ペ] タフヤ（の奉仕する週）の安息日、2月の30日（に当たる）。新月は、ヘジ [ル]（の奉仕する週）の第1日、[同じ月の17日（に当たる）。(満月は、) デラヤ（の奉仕する週）の第1日、29日。]

## 【注釈】

第2欄のつづきで、第3年の1月から始まっている。

## 注

- (1) 蛭沼寿雄・関根正雄著「死海文書の全容」『死海文書』日本聖書学研究  
所編、山本書店(1963年)36—38頁。K・ベルガー著、土岐健治監訳『死  
海文書とイエス』教文館(2000年)、62頁以下。高橋正男著「クムラー  
ン宗教集団暦」『地中海の暦と祭』地中海学会編、刀水書房(2002年)、  
46—49頁には、この暦の特徴が詳しく紹介されている。
- (2) K・ベルガー＝注(1)、63頁。
- (3) Shemaryahu Talmon, Kalender und Kalenderstreit in der Gemeinde von  
Qumran, in: Gesellschaft und Literatur in der Hebräischen Bibel: ges.  
Aufsätze, Neukirchener Verl. Bd. I (1988) 152ff. 同じ地域の教団の内部で祭  
日が1日でも異なれば事態は深刻である。この論文で Talmon は、タル  
ムードに記された次のようなエピソードを紹介している(158f.)。新月  
の観測をめぐるサンヘドリンの議長であったラバン・ガマリエルとラ  
ビ・ヨシュアとの間で論争が起こった。ラビ・ヨシュアが、ガマリエルの  
承認した新月を観測したとの証言を信用しなかったからである。おそ  
らくこの論争は、新年の祭とそれにつづく贖罪の日に関係するものであ  
ったから、ラビ・ヨシュアが自己の主張を通したらユダヤ教団の分裂に  
まで発展しかねない事態になった。しかし彼は忠告に従って、贖罪の日  
に「自分の杖と金を手にもってヤブネのラバン・ガマリエルのもとに出  
向いた」。The Mishnah, tr. by H. Danby, Oxford (1933) 190f. Rosh Ha-Shanah,  
2.8-9をも参照。
- (4) ユダヤ教暦は、正しくは太陽太陰暦である。1年を354日の太陰暦にす  
ると、太陽暦とは1年間に約11日間の誤差が生じる。ペサハ(過越祭)  
は常に春でなければならないし、ニサン月15日と定められている。そこ  
で現代では19年に7回の割合で「閏年」を設けている。閏月は「アダル」  
を繰り返す。現代のユダヤ教暦では、秋から新年が始まる(ティシュレ

ーが1月)が、王国時代後期以降の旧約時代には、春から新年が始まっていた(ニサンが1月)。したがって、閏月の第二アダルが13月となっていた。高橋正男=注(1)参照。

- (5) 「ヨベル書」「エチオピア語エノク書」は、ともに『聖書外典偽典4』教文館(1975)に収められている。特にヨベル書6章、エノク書72—74章を参照。
- (6) この文書に最初に係ったJ.T. Milikの解釈以来の多数意見であって、GlessmerやVanderKam等もこれに従う。Johann Maier, *Die Qumran-Essener: Die Texte vom Toten Meer*, Band II, UTB1863, Reinhardt (1995) 279ff. ; Florentino Garcia Martinez and Eibert J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls Study Edition Vol.2*, Brill (1998) 679ff. の翻訳でもこの説を採用している。
- (7) Talmon等によって提唱されている学説。Discoveries in the Judean Desert XXI. Qumran Cave 4 XVI. Calendrical Texts, by S. Talmon with the assistance of J. Ben-Dov は、この立場。さらに、Michael O. Wise, *Second Thoughts of DWQ and the Qumran Synchronistic Calendars*, in : *Pursuing the Text* . JSOTS 184, Sheffield (1994) 98-135. は、4 Q317の月の満ち欠けに関するテキストの解説からこの学説を支持する。太陽暦が優勢であったエジプトでも太陰暦は、朔日から始まっていることにも注目している。
- (8) Michael O. Wise=注(7)100.
- (9) DJD XXI=注(7)34.
- (10) DJD XXI=注(7)45. Talmon は、この表現は単に「1日」を意味するだけであると説明する。
- (11) 翻訳と注解に際しては、DJD XXI=注(7)の提示する校訂テキストと翻訳および巻末の写真版をまず参照した。Garcia Martinez=注(6)のヘブライ語—英語対訳版と Johann Maier のドイツ語訳も適宜参照した。
- (12) DJD XXI=注(7)37f. 参照。以降の断片に関する形状の説明も DJD によるので、参照箇所をいちいち指示しない。
- (13) DJD XXI=注(7)44. この論証の仕方は不十分である。



- (14) 4 Q320断片 4、第 2 欄14行目参照。
- (15) DJD XXI=注(7)214ff.
- (16) 関根正雄・松田伊作・石田友雄訳「宗規要覧 (1 QS)」『死海文書』日本聖書学研究所編、110頁。Garcia Martinez 版の Vol.1.94-95.
- (17) Hayyim Schauss, *The Jewish Festivals*, New York (1938) 87f. サドカイ派は、オメルを過越の後の最初の日曜日とする。七週の祭は過越の後の第 7 日曜日になる。クムランではオメルは過越の後の第 2 日曜日になる。
- (18) Garcia Martinez 版の Vol.2.700-701.

# 復元されたカレンダー表（第1年）

## 第1年

| 1月      | 日    | 月    | 火    | 水    | 木    | 金    | 土    |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|
| ガムル     |      |      |      | 1 X  | 2    | 3    | 4    |
| デラヤ     | 5    | 6    | 7    | 8    | 9    | 10   | 11   |
| メオズヤ    | 12   | 13   | 14   | 15   | 16   | 17 D | 18   |
| ヨヤリブ    | 19   | 20   | 21   | 22   | 23   | 24   | 25   |
| イエダアヤ   | 26   | 27   | 28   | 29   | 30 X |      |      |
| 2月      | 日    | 月    | 火    | 水    | 木    | 金    | 土    |
|         |      |      |      |      |      | 1    | 2    |
| ハリム     | 3    | 4    | 5    | 6    | 7    | 8    | 9    |
| セオリム    | 10   | 11   | 12   | 13   | 14   | 15   | 16   |
| マルキヤ    | 17 D | 18   | 19   | 20   | 21   | 22   | 23   |
| ミヤミン    | 24   | 25   | 26   | 27   | 28   | 29   | 30 X |
| 3月      | 日    | 月    | 火    | 水    | 木    | 金    | 土    |
| ハコツ     | 1    | 2    | 3    | 4    | 5    | 6    | 7    |
| アビヤ     | 8    | 9    | 10   | 11   | 12   | 13   | 14   |
| イエシュア   | 15   | 16 D | 17   | 18   | 19   | 20   | 21   |
| シェカンヤ   | 22   | 23   | 24   | 25   | 26   | 27   | 28   |
| エルヤシブ   | 29 X | 30   | 31   |      |      |      |      |
| 4月      | 日    | 月    | 火    | 水    | 木    | 金    | 土    |
|         |      |      |      | 1    | 2    | 3    | 4    |
| ヤキム     | 5    | 6    | 7    | 8    | 9    | 10   | 11   |
| フッパ     | 12   | 13   | 14   | 15 D | 16   | 17   | 18   |
| イエシェブアブ | 19   | 20   | 21   | 22   | 23   | 24   | 25   |
| ビルガ     | 26   | 27   | 28 X | 29   | 30   |      |      |

| 5月     | 日  | 月  | 火  | 水   | 木   | 金  | 土  |
|--------|----|----|----|-----|-----|----|----|
|        |    |    |    |     |     | 1  | 2  |
| イメル    | 3  | 4  | 5  | 6   | 7   | 8  | 9  |
| ヘジル    | 10 | 11 | 12 | 13  | 14D | 15 | 16 |
| ピッツエーツ | 17 | 18 | 19 | 20  | 21  | 22 | 23 |
| ベタフヤ   | 24 | 25 | 26 | 27X | 28  | 29 | 30 |

| 6月     | 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金   | 土   |
|--------|----|----|----|----|----|-----|-----|
| イエヘズケル | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6   | 7   |
| ヤキン    | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 | 13  | 14D |
| ガムル    | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20  | 21  |
| デラヤ    | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27X | 28  |
| メオズヤ   | 29 | 30 | 31 |    |    |     |     |

| 7月    | 日   | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土   |
|-------|-----|----|----|----|----|----|-----|
|       |     |    |    | 1  | 2  | 3  | 4   |
| ヨヤリブ  | 5   | 6  | 7  | 8  | 9  | 10 | 11  |
| イエダアヤ | 12D | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18  |
| ハリム   | 19  | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25X |
| セオリム  | 26  | 27 | 28 | 29 | 30 |    |     |

| 8月   | 日  | 月   | 火   | 水  | 木  | 金  | 土  |
|------|----|-----|-----|----|----|----|----|
|      |    |     |     |    |    | 1  | 2  |
| マルキヤ | 3  | 4   | 5   | 6  | 7  | 8  | 9  |
| ミヤミン | 10 | 11  | 12D | 13 | 14 | 15 | 16 |
| ハコツ  | 17 | 18  | 19  | 20 | 21 | 22 | 23 |
| アビヤ  | 24 | 25X | 26  | 27 | 28 | 29 | 30 |

| 9月    | 日  | 月  | 火   | 水   | 木  | 金  | 土  |
|-------|----|----|-----|-----|----|----|----|
| イエシュア | 1  | 2  | 3   | 4   | 5  | 6  | 7  |
| シェカンヤ | 8  | 9  | 10  | 11D | 12 | 13 | 14 |
| エルヤシブ | 15 | 16 | 17  | 18  | 19 | 20 | 21 |
| ヤキム   | 22 | 23 | 24X | 25  | 26 | 27 | 28 |
| フツバ   | 29 | 30 | 31  |     |    |    |    |

| 10月     | 日  | 月  | 火  | 水  | 木   | 金   | 土  |
|---------|----|----|----|----|-----|-----|----|
|         |    |    |    | 1  | 2   | 3   | 4  |
| イエシェブアブ | 5  | 6  | 7  | 8  | 9   | 10D | 11 |
| ビルガ     | 12 | 13 | 14 | 15 | 16  | 17  | 18 |
| イメル     | 19 | 20 | 21 | 22 | 23X | 24  | 25 |
| ヘジル     | 26 | 27 | 28 | 29 | 30  |     |    |

| 11月    | 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金   | 土  |
|--------|----|----|----|----|----|-----|----|
|        |    |    |    |    |    | 1   | 2  |
| ピッツエーツ | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  | 8   | 9D |
| ベタフヤ   | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15  | 16 |
| イエヘズケル | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22X | 23 |
| ヤキン    | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29  | 30 |

| 12月   | 日   | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|-------|-----|----|----|----|----|----|----|
| ガムル   | 1   | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  |
| デラヤ   | 8   | 9D | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| メオズヤ  | 15  | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| ヨヤリブ  | 22X | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| イエダアヤ | 29  | 30 | 31 |    |    |    |    |